

弘前大学医学部附属病院で診療を受けられる皆様へ

本院では、下記の研究を実施しておりますのでお知らせいたします。

本研究の対象者に該当する可能性のある方で、情報を研究目的に利用されることを希望されない患者さんもしくは患者さんの代理人の方は、下記の連絡先までお申し出ください。

1. 研究課題名	当科で経験した子宮頸部腺癌についての臨床病理的検討			
2. 対象患者	弘前大学医学部附属病院で子宮頸癌と診断された204例の患者様			
3. 対象となる期間	2001年1月1日 ~ 2011年 12月 31日			
4. 実施診療科等	産科婦人科学講座			
5. 研究責任者	氏名	二神真行	所属	産科婦人科学講座
6. 共同研究機関 (共同研究機関研究責任者)	なし			
7. 研究の意義	<p>子宮頸癌は、近年日本で罹患率、死亡率ともに増加傾向にある癌です。組織型においては、扁平上皮癌が最も高い割合を占め、次いで腺癌が多いです。近年子宮頸部腺癌が、特に若い女性において増加傾向にあるといわれており、先進国では全子宮頸癌の20-25%を占め、日本では22%を占めているとされています。扁平上皮癌の治療においては、早期癌では手術、進行癌では放射線同時化学療法 (CCRT) が標準治療とされていますが、子宮頸部腺癌および腺扁平上皮癌は、放射線療法・化学療法ともに抵抗性を示しその治療も完全に定まっているとは言えません。また扁平上皮癌と比較すると、子宮頸部腺癌・腺扁平上皮癌は予後不良であるとされており。</p> <p>さらに2014年に子宮頸部腫瘍の分類が改訂されており、主に子宮頸部腺癌の組織型の改訂が行われました。それにより特に予後不良と言われる胃型腺癌が追加となっています。</p> <p>そこで、今回我々は自施設における子宮頸部腺癌・腺扁平上皮癌の予後が、扁平上皮癌と比べて悪いのか、その中でも胃型腺癌の予後が特に悪いのかどうか検討することとしました。この結果が判明すれば、今後の日常診療において大いに役立つと思われます。</p>			
8. 研究の目的	本研究の目的は、当院で治療が行われた子宮頸部腺癌及び腺扁平上皮癌について、主に扁平上皮癌と比較して臨床病理学的因子を検討することです。			
9. 研究の方法 (使用・提供する資料等および外部に提供する場合の方法等)	対象症例について、発症年齢、組織型、FIGO進行期分類、治療法、5年生存率についてカルテを用いて後方視的に検討した。子宮頸部腺癌と診断された病理組織について、産婦人科医1名、病理医1名によりWHO分類2014に従って再評価を行います。外部への資料情報の提供はありません。			
10. 個人情報の保護	<p>対象となるデータについては、カルテから抽出後、個人を特定できないよう加工(匿名化)し、ネットワークに繋がっていないPCに保存し、管理します。</p> <p>また、拒否の申し出があった場合は速やかに当該患者様のデータを削除します。ただし、既に発表してしまった場合は、データの削除、修正には応じられませんので、御了承願います。</p>			
11. 利益相反に関する状況	本研究に係る経費は、産婦人科学教室の研究費からまかなわれます。利益相反はありません。			
12. 連絡先	弘前大学医学部産科婦人科学教室			
	電話	0172-39-5107	FAX	0172-37-6842